



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知里博士のアイヌ語研究：合成名調の構造をめぐって
Author(s)	佐藤，知己
Description	生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保 人と学問」．平成21年2月22日．札幌市．
Citation	知里真志保 人と学問：生誕百周年記念シンポジウム予稿集，32-37
Issue Date	2009-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38288
Type	conference paper
File Information	5_32-37.pdf



佐藤知己

(北海道大学大学院文学研究科准教授)

1. はじめに

知里博士の『アイヌ語入門』(1956)はアイヌ語研究史上、極めて重要な意義を持つものである。それまでの研究者が全く気がつかなかったアイヌ語の文法的特徴を鋭く指摘したものであり、その指摘の独創性、重要性は今日も失われていない。ここでは、知里博士のお考えを紹介し、今日的な観点から検討し、それによって知里先生のアイヌ語研究の特色の一端に触れることにしたいと思う。

2. 『アイヌ語入門』の学問的意義

アイヌ語の合成名詞の構造についての重要な指摘としては、なによりもまず知里(1956)があげられる。知里博士は専門的な学術論文としてこの問題を論じることはなかったが、その主要な論点は一般向けを意図したこの書物の中においても十分に述べられていると言えよう。知里博士の考えがよく現れている部分としては、たとえば以下のような個所を挙げることができるであろう。

日本語では「神が・遊ぶ・広場」「鹿が・出てくる・沢」「丸山の・ある・沢」などという言い方は、ごくありふれた言い方で、ちっともおかしくない。ところがアイヌ語ではそういう言い方はしない。そういう言い方をしても意味が通らないのである。ではどういう言い方をするか。「神が・そこで・遊ぶ・広場」「鹿が・そこへ・出てくる・沢」「丸山が・そこに・ある・沢」というような言い方をするのである。たとえば次のように。

kamuy o-sinot mintar 「神(が) —そこで・遊ぶ—広場」

yuk o-san nay 「鹿(が) —そこへ・出てくる—沢」

tapkop e-an nay 「丸山(が) —そこに・ある—沢」

これらの o- や e- は、それらがなければ意味が通らないほど、上のアイヌ語の表現の中では重要な役割を演じているのである。

(知里 1956: 227)

知里博士のこの説明は、sinot「遊ぶ」、san「出てくる」、an「ある」という自動詞は、このままでは名詞の構成要素としては不適格なのであり、それぞれ o-sinot「ーで遊ぶ」、o-san「ーへ出てくる」、e-an「ーにある」のような他動詞化を行わなければならない、ということを述べたものとみることができる。さらに言えば、自動詞は主語一つだけしか取らない動詞であるから、sinot、san、an という自動詞のままではそれぞれ「神、広場」、「鹿、沢」、「丸山、沢」という二つの名詞と統合できない、ということ指摘したものとみることができる。アイヌ語の名詞の構造に関わる重要な原則を述べたものと言うことが

できるであろう¹。

3. 『アイヌ語入門』以後

知里博士が『アイヌ語入門』の中でアイヌ語地名を例としてなされた、アイヌ語の合成名詞の構造に関する指摘は、アイヌ語の文法構造を考える上で非常に重要な指摘であったと言わなければならないが、その後、しばらくの間はこの知里博士の説を正面から取り上げた研究というものは出なかったと言える。その理由としては、あくまでも私見であるが、二つの事が考えられると思う。まず第一に、知里博士がアイヌ語研究の圧倒的権威としてその後、長く仰ぎ見られる存在であったために、その説をいわば疑うような研究の出る余地が容易には生まれ得なかった、ということは否定できないであろう。第二に、知里博士以後のアイヌ語研究の主流が、服部四郎博士によって主導された、現地調査を重んじる精密な記述研究へと次第に移っていったために、現地調査による記述研究に比べ理論面の研究が、どちらかと言えば緊急性の低いものとみなされた、という事情があったのではないかと思われる。このような推測の当否は別として、知里説の本格的な検討は、発表後、切替(1984)の登場まで、実に約三十年という年月を待たなければならなかった。

3.1. 切替(1984)の研究

切替(1984)はアイヌ語学の歴史上から言っても、極めて重要度の高い、優れた研究であると言ってよい。中でも重要なのは、知里博士の説を承けて、アイヌ語の名詞表現の中には、よく似てはいるが構造上区別しなければならない二種の構造があることを指摘したことである。

修飾句は、それが ある ことによって文が完成するような名詞的要素を一つ欠き、その欠けているものを被修飾語とする・・・(中略)・・・このように規定される一群の名詞句を以下、「修飾構造」をなしていると言うことにする。

切替(1984: 108)

実は、知里博士の合成名詞(地名)に関する説明は、切替がここで述べている「修飾構造」に当たるものとしては適切なものであった。しかしながら、実は知里博士が例として用いているもののなかには単純な修飾関係では説明不可能な、知里博士自身が述べたアイヌ語の名詞構造に関する説明原理と矛盾するものが多く含まれていたのである。この点に初めて気が付き、知里説の不十分さ指摘したのは切替の卓見であった。切替はこの点について次のように述べる。

名詞句には修飾構造をなしているものばかりでなく、一見修飾構造に似ているが、これと区別されるものもある。たとえば、次の名詞句：6. i-sapak kik ni (kik「一がーを打つ」)〈神謡 p. 82; p.102〉。網ないしどうにかかった魚の頭を打つ棍棒のことで、

¹ アイヌ語の動詞が一定の数の名詞的成分を要求する、という性質については知里博士以後、田村(1972)においてもアイヌ語の重要な特徴の一つとして取り上げられている。

原文には「魚をとる道具」〈神謡 p. 83; p. 103〉と訳されている。i-sapa「その頭」(魚の頭)は他動詞 kik の目的語である。前節でみたように、「目的語・他動詞・」という修飾語からは次に主語相当要素が立つことが期待される。しかし ni「木」は主語に相当するとは考えられない・・・(中略)・・・このように、修飾構造のみられない名詞句を以下、「疑似修飾構造」をなしていると言うことにする。

切替(1984: 108-9)

切替のこの指摘は、それまで気が付かれていなかったアイヌ語名詞の重要な型の存在を指摘したものとして極めて重要である。さらに、切替(1984: 117-8)はアイヌ語において自動詞が名詞的に機能することを確認した上で、アイヌ語の名詞構造をより一般化して次のように述べる。

先にわれわれは疑似修飾構造なるものの存在を見いだした。それは、主語を欠く自動詞的形式と二次的構成的な名詞との結合ということであった。その場合の主語を欠く自動詞的形式も、それ自体が既に名詞的機能を果たしていると考えてよいのではないだろうか・・・(中略)・・・疑似修飾構造はそのうちの g.「名詞・名詞」型として分類される。

切替(1984: 118)

すなわち、切替の結論によれば、アイヌ語の動詞的形式を構成素に含む名詞は、一般的な規則によって形成されるものとしては、知里博士によって発見された「修飾構造」の条件を満たすものと、名詞＋名詞型(自動詞＋名詞を含む)に属するものの二種が存在する、ということになる。

また、切替はもう一つ重要な指摘を行っている。

他動詞に基づく修飾構造をなすもので、複合名詞とみられる例は、後述する特別の類を除けば比較的僅かである。管見では「主語・他動詞・目的語相当要素」のものは次の一例のみである。: 16. eper se sito「熊(が)・背負う・もち」(熊祭りのとき、熊に土産として持たせるもち。se「一がーを背負う」)。用例の僅少さは、この型の修飾構造が一つの合成語としてまとまるだけの力に不足していることを示唆しているのかもしれない。ただし、同じ型で、いわゆる主格接頭辞 ci- を主語の代りに立てた例は多い: 17. ci-ma cep「人が・火にあぶる・魚」(火に当てて干した魚。ma「一がーを火にあぶる」); ci-sura-p「人が・放す・もの」(三歳以上の、母熊から離れた熊。sura「一がーを放す」)。

切替(1984: 113)

すなわち、切替は、eper se sito「クマが・背負う・団子」のような「主語＋他動詞＋名詞」型の複合名詞が少ないことを指摘している。もっとも、その理由については明白には述べていない。

3.2. 佐藤(2008)の研究

佐藤(2008)は知里(1956)、切替(1984)の研究を踏まえ、それらの問題点を理論的に検討している。その趣旨は以下のようなものである。

1) 従来言われていたアイヌ語における「修飾構造」を有する合成名詞と「疑似修飾構造」を有する合成名詞という区別には実は理論的には問題がある。アイヌ語の合成名詞において修飾構造と呼ばれているものは、屈折形式である動詞人称形の出現を当然の前提とするので、このままでは「語は統語的な構成素を排除する」という語形成の“syntactic atomicity”に抵触する恐れがある。

2) アイヌ語には「修飾構造」を有する複合名詞も実際にはあると考えられるがそれらのあるものは句を語として用いるようになったために生じた「句単語」と考えられる。

3) 「句単語」は句の中のあるものがなんらかの理由で語として用いられるようになった散発的なものと考えられる。そのことは実際の言語データの分析からもうかがえる。千歳方言のデータを実際に分析してみると、最も句と紛れやすい「修飾構造」を有する「目的語名詞＋他動詞＋主語名詞」型の合成名詞の例は神名、動植物名、役職名にほぼ限られており、数も少ない。

4) 「句単語」との判別は實際上困難であるが、「目的語名詞＋他動詞＋主語名詞」型の合成名詞の中には「目的語名詞＋他動詞」を「抱合」として扱って、一つの自動詞としたものもあるとみられる。自動詞は名詞に転成可能なので、全体が「名詞＋名詞」型と解釈可能なため、この型の形式はアイヌ語の語形成規則により適合した形式である可能性がある。このことは、理論的には可能と思われる「主語名詞＋他動詞＋目的語名詞」型の合成名詞の例が千歳方言の実際のデータでは皆無といってもよいような状況であることと符合する。アイヌ語の抱合では「主語名詞＋他動詞」というパターンは極めて稀であることから、「主語名詞＋他動詞」は通常は「句」と解釈される可能性が高い。そのため、「語」として用いるにはより有標性が高い形式として忌避されるのだと考えられる。

5) 識別の困難さの問題は別として、結局のところ、アイヌ語の動詞的形式を含む合成名詞は、「句単語」型複合名詞と「自動詞転成名詞＋名詞」型合成名詞の二種に大きく分かれる。「自動詞転成名詞＋名詞」型合成名詞の中には修飾構造(主語―述語関係)が成立しないものと、見かけ上、修飾構造が成立するものがあるが、いずれも名詞的な形式が複合したものと考えることが可能であり、語としての許容度は相対的に高いと考えられる。

次に、この結果を、さらなるデータで検証してみることにする。

3.3. 『分類アイヌ語辞典植物篇』の分析結果

佐藤(2008)は佐藤の千歳方言に関する実地調査資料において得られた知見を、中川(1995)のデータによって検証したものであるが、分析対象としたデータが量的に必ずしも必要十分なものとは言えない面があった。そこで今回、同様な検証を知里(1953)によって試みた。その主要な結果は以下の通りである。

1) 知里(1953)に含まれる合成名詞において、もっとも多いのは、「名詞＋名詞」型に属するものである(412例)。

2) 「目的語名詞＋他動詞」を含むもののうち、いわゆる疑似修飾構造を示すものは12例、修飾構造を示すものは17例である。

3) 「主語名詞＋他動詞＋目的語名詞」の型に属するものは、paskur-e-p「カラス・食う・もの」(「カンボク」の果実)、tutut-e-x「ツツドリ・食う・もの」(「フクジュソウ」の果実)の2例のみである。

この結果は、基本的には佐藤(2008)で得られている結果と極めてよく一致していると言える。すなわち、「目的語名詞＋他動詞＋主語名詞」という構造を含む合成名詞は全体から見ると極めて数が限られている。これは、抱合による自動詞化によって回避される可能性があるとはいえ、人称接辞による動詞屈折形を含む「句」と紛れやすい型であるからだ、と説明できる。また、「主語名詞＋他動詞＋目的語名詞」型の例が2例しかない、ということもこのことを裏書きするものと言える。すなわち、「主語名詞＋他動詞」は抱合の可能性が極めて低く、動詞屈折形を含む「関係節」(名詞句)と解釈される可能性が高い形式であるから、原則、合成語の構造から排除されるのだと考えられる。なお、佐藤(2008)では、データ数が多くないために結論を保留したが、今回の調査においても「疑似修飾構造」を示す例がそれほど多くない、という点は注目に値する。すなわち、「疑似修飾構造」は、「関係節」とは考えにくい意味関係を含む構造であるので、相対的には「語」としての許容度は高いわけであるが、今回の調査結果を踏まえると、一步踏み込んだ推測が可能かもしれない。すなわち、「目的語名詞＋他動詞」という構造そのものが、抱合による名詞化の可能性は残しているとはいえ、やはり関係節と同型の「曖昧な構造」であるために、語としての許容度は、やはりそれほど高くない、と考える必要があるかもしれない。

4. おわりに

知里(1956)の合成名詞に関する指摘は重要なものであるが、知里博士ご自身が採集された合成名詞データの分析に基づく、そこでたまたま知里博士が挙げられた例は、地名の例であるとはいえ、いずれもアイヌ語の合成名詞一般の規則から言えば、他動詞主語を含む関係節構造とみなされる可能性が高い、アイヌ語の合成名詞としてはもっともペナルティー度が高い可能性のある形式であったことになる。この点で知里博士の説をそのまま是認することは現時点ではアイヌ語の合成名詞形成に関して誤解を生むものであると言わなければならない。また、知里博士を含め、それ以後の研究も理論面で問題がなかったわけではない。しかし、知里博士の鋭い問題意識がなかったら、このような奥深い文法的制約が、アイヌ語の合成名詞に存在していることには、そう誰もが易々とは気づかなかったであろうこともまた事実である。知里博士だけが、なぜこの問題の所在に最初に気づくことができたのだろうか。知里博士が類稀な天才であったことは間違いない。しかし、本来、学問は普遍的であるべきで民族や人種による有利、不利はないはずである。だが、知里先生には、この点で同時代の他の研究者にはないものがあつたのだと私には思える。すさまじいまでのアイヌ語に対する強い思いである。「アイヌ語には整然とした、美しい規則が絶対にあるはずだ」というゆるぎない信念と、語弊のある言い方かもしれないが「日

本人などにアイヌ語がわかってたまるか」という強烈な自負が、当然ながら研究の背景にあるように思えてならないのである。ここで私的な感情を述べることをお許しいただけるならば、知里博士と全く同じ思いを持つことは私にはできないだろうし、残念ながら頭脳も遠く及ばないかもしれない。しかし、アイヌ語の研究が素晴らしく興味深いものである、という気持ちだけは知里先生にも負けないつもりである。知里先生がご存命だったら、失礼を顧みず申し上げるだろう。「先生、先生とは立場は違うかもしれないけれど、俺だって、なかなか先生には負けませんよ。先生も気づかなかったアイヌ語の奥深さを明らかにして、いつの日か、先生を必ずギャフンと言わせてみせますよ。」と。

参考文献

- Bloomfield, L. 1933. *Language*. London: George Allen and Unwin.
- 知里真志保. 1953[1976]. 『分類アイヌ語辞典第一巻植物篇』. 日本常民文化研究所. (『知里真志保著作集別巻1』. 平凡社.)
- _____. 1956. 『アイヌ語入門』. 楡書房.
- Di Sciullo, Anna Maria and Edwin Williams. 1987. *On the Definition of Word*. Cambridge: MIT Press.
- 切替英雄. 1984. 「アイヌ語の名詞句の構造と複合名詞」. 『言語研究』86. 105-21.
- 中川裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』. 草風館.
- 佐藤知己. 1992. 「「抱合」からみた北方の諸言語」. 宮岡伯人編『北の言語』. 三省堂. 191-201
- _____. 2005. 「アイヌ語地名研究と言語学」. 『アイヌ語地名研究』8. 153-80.
- _____. 2008. 『アイヌ語文法の基礎』. 大学書林.
- 田村すず子. 1972. 「述部の構造に関する一考察—動詞句の要求する成分」. 服部四郎先生定年退官記念論文集編纂委員会(編). 『現代言語学』. 三省堂. 409-26.